

LC いぽーと

48

2021年10月

〒663-8558 西宮市池開町 6-46  
武庫川女子大学 言語文化研究所  
ilc@mukogawa-u.ac.jp  
Tel : 0798-45-3536  
Fax : 0798-45-3574

## LINE 会話の終わり方・抜け方

——大学生はどうやって LINE での会話を終わらせているか——

LINE での会話は、相手の顔が見えない、文字を中心としたコミュニケーションですが、対面や電話でのおしゃべりに似た一面もあります。対面の場合、会話を終える時には、何度もお辞儀をしたり別れの挨拶を繰り返し言い合ったり、また、電話では、用件を再確認したり別れの挨拶を交わし合ったりといったことが一般的だとされます。いずれも、別れ際における相手への配慮であり、円滑なコミュニケーションのために行われる一定の行動様式とされるものです。

では、顔が見えず声も聞こえない LINE では、どうやって会話を終わらせているのでしょうか。会話を終わらせる際に、気を遣ったり戸惑ったりすることはあるのでしょうか。調査では、大学生の LINE の終わらせ方にいくつかのパターンが確認されました。また、さまざまな工夫や苦勞、葛藤などもありそうです。今回のレポートは、大学生は LINE 会話のやめ時に悩むことはあるのかどうか、そして、LINE 会話の終わり方、抜け方をどのように行っているのかについて、実態を報告します。

### 1. 調査概要

- ・調査対象者：「SNSから日本語を見る」<sup>1</sup>2020 年度受講者（198 人）有効回答数 186。
- ・調査方法：グーグルフォームに設問を投稿し、受講者が回答を入力する。  
設問は次の A・B 二種類を設定した。回答は自由記述とし、収集したデータから情報を抽出した。
- ・設問内容：A：1 対 1 での LINE でやり取りが続く場合について。LINE のやめ時にまつわるあなたの経験やその時の気持ちについて教えてください。  
B：グループ LINE でのやり取りが続く場合について。LINE のやめ時にまつわる経験やその時の気持ちについて教えてください。

<sup>1</sup> 本学の共通教育科目。2020 年度は Google Meet による遠隔授業で行った。

## 2. 調査結果 — LINE のやめ時は気にする？

表 LINEのやめ時を気にするか	人(%)	
	1対1	グループ
気にする	177 (95.2)	45 (24.2)
気にしない	9 (5.6)	141 (75.8)

まず、LINE のやり取りが続いている中で、やめ時を気にするかどうかを確認する。

1対1の場合は約95%と、ほとんどの大学生がLINEのやめ時を気にしている。反対に、グループでは「気にしない」が約76%である。1対1ではお互いが唯一の当事者であるため、会話を切り上げるタイミングをはかる難しさを感じたり、会話を終えることへの罪悪感を覚えたりすることもあるだろう。そのため、相手への配慮がより強く意識され、やめ時が気になるのだと考えられる。他方、グループの場合は、自分以外のメンバーが対応してくれるだろうと思える点で、1対1に比べると気が楽だと言える。言い換えると、会話場面における当事者意識の強弱による違いである。グループでは、話題が自分にかかわる内容であれば積極的に発言し、そうでなければ傍観者であることができる。1対1ではできないことだ。

まずは、それぞれの具体的なコメントをいくつか列挙しておこう。

### [1対1：気にする]

- ・スタンプだけが無限ループされると終わり時が分からない。
- ・スタンプだけが返ってきた時はやめてほしいという意思表示なのか判断に迷う。
- ・スタンプで終わらせようとしたのに会話が続きとメンドクサイとってしまう。
- ・やめどきがわからなくて同じ話題を繰り返してしまう。
- ・会話が終わると、正直やっと思ったと思う。

### [1対1：気にしない]

- ・スタンプを送れば終わりなので何も思わない。
- ・「お風呂に入る」って言えるから気にしない。

### [グループ：気にする]

- ・自分が最後の発言になりたくないのでタイミングに注意している。
- ・最後の発言に反応がないのはかわいそうなので、スタンプを送っている。
- ・全員に共通する話題がダラダラ続くと抜けられない。

### [グループ：気にしない]

- ・自分が言いたいことが終われば他の人が会話をしているも気楽に終われる。
- ・1対1のめんどくささがない。
- ・スタンプを送れば罪悪感はない。
- ・自分が返信しなくてもだれかがしてくれるだろうと思う。
- ・複数人の場合、話に入らずそのまま会話の輪から抜けても大丈夫な気がする。

上のコメントからは、いずれの場合も「スタンプ」が LINE を終わらせるサインとして機能していることが推測される。コメントを整理すると、LINE の終わり方には、「スタンプ」を含めて複数のパターンがあることが分かった。以下に多かった回答 6 パターンを紹介する。

### 3. 調査結果 — LINE の終わり方

#### 3.1 方法1 スタンプ 計 137 人

1対1	グループ
91人	46人

上述したように、LINE の終結部ではスタンプを利用するという回答が多い。これは、LINE を送る側だけではなく、相手から送られてきた時にも、「そろそろ終了」という合図として受け取られる場合が多い。スタンプは気軽に使える終了のサインなのだ。ただ、回答が多いとはいえ、双方がその意識を共有していることが前提である。一方がそれに気づかなければ、「スタンプで終わらせようとしたのに会話が続くとメンドクサイ」や「スタンプを送って終わらそうとしたのに、相手からそのスタンプかわいいねと返信がきて終われなかった時は困った」のようなことになり、スタンプを送っても役に立たない。

#### 3.2 方法2 短い返信 計 49 人

1対1	グループ
32人	17人

返信を短い語句のみにするというものである。語句の内容によって、5つにグルーピングできる。

①「へえー」「うん」「そっか」「そやね」「それな」「なるほど」などのあいづち系 ②「おけ」「り」「了解」「わかった」などの了承系 ③相手の文言と同じ文言を返すオウム返し系 ④「笑」「笑笑」「。」(句点のみ) など、明確な意味をもたない記号系 ⑤一般的な会話の終結部と同様の、「おやすみ」「じゃあまたね」「今日はありがとう」「また〇〇しよう」「バイバイ」などのクロージング系である。①のあいづちは、通常の会話では「発言された部分を理解した上でその先を促す」(波下線は筆者。日本語学会編『日本語学大辞典』東京堂出版)と説明されるが、LINE 会話では、反対に、会話を終了させる役割を担わせている点が興味深い。短い返信は、新しい話題を提供しないこと、会話が続かないようにすること、また、相手に返信の必要性を感じにくくさせることを狙ったものなのである。

#### 3.3 方法3 既読無視 計 48 人

1対1	グループ
23人	25人

「既読スルー」ともいう。送信した内容を相手が開くと画面上に「既読」マークが表示される。実際に内容を「読んだ」かどうかは別として、少なくとも受信者がメッセージに気付いたことが送信者に分かる仕組みだ。既読無視というのは、それにもかかわらず返信がないという状態である。この回答で多かったのが、上記のスタンプや短い返信が来た時の対応としての既読無視である。つまり、もう返信しなくてもかまわないという判断がなされた上で会話が終了するため、結果として既読無視の状態になる。

### 3.4 方法4 未読無視 計39人

1対1	グループ
18人	21人

こちらは既読マークをつけないまま、放置しておくパターンである。「読まない」ことで終了の意思表示をする。この回答で多かった理由が「返信がめんどうくさい」というものだ。用件に必要な会話が終わったのなら、LINE画面の表示さえもしないというものである。

### 3.5 方法5 返信間隔をあける 計29人

1対1	グループ
20人	9人

会話のテンポを少しずつ遅くしていく方法である。この回答で興味深いのは、1対1の場合がかなり多いことだ。既読無視や未読無視で終わると罪悪感や気まずさがある。返信をしないのはコミュニケーション上、あまり好ましくないと考え、それを避けるために、いったん何もしない時間を作った上で反応を返す。その空白時間が会話終了のサインになるというわけだ。

### 3.6 方法6 ウソも方便！ メシ・フロ・ネル 計26人

1対1	グループ
19人	7人

最後にあげるのは、何らかの口実を作って会話を抜けるというものである。多くの場合、それは、メシ・フロ・ネルの3種類になる。これらは、会話を終える理由として定番なのだろう。また、理由を伝えることによって、円満に会話を終わらせようとする意図がうかがえる。これも返信間隔をあけるのと同様、1対1の方が多い。いずれも相手に対する配慮であり、会話を終了させることへの免罪符として活用される方法だと言える。

#### 「解決策」としての「知恵」は「ルール」へ？

見てきたように、LINEであっても会話を終える時には相手への配慮ゼロというわけにはいかない。ただ、配慮や丁寧さの程度がどうかという点では、従来の対面や電話とはやや様子が異なる。LINEでは、互いに何度も別れの挨拶を繰り返したりということはない。そっけない表現を終了合図のように用いてフェードアウトしていくというのが現状のようだ。

コミュニケーションツールとしての歴史が浅いLINEでは、対面や電話のような、会話終了に向かう一定の形式が確立しているとは言い難い。とは言え、いかに円滑に、また、より小さなストレスで会話終了を成立させるかという点においてはLINEも同様だ。6つのパターンは、そういった場で模索しつつ生まれた「解決策」であり、「知恵」だと考えられる。そして、「解決策」として編み出されたこれらの「知恵」は、今後、多くの人を知り、使いこなすことで「ルール」へと昇格する可能性がある。今はその過渡期にあると言えるだろう。このような中で、大学生が試行錯誤し、時に悩み、そしてやりとりを楽しむ姿が垣間見える。

作成にあたりご助言をいただき佐竹秀雄先生、調査に協力してくれた学生の皆さんにお礼を申し上げます。  
担当：岸本 千秋 作業協力者：向井 弥生